

聖書:テサロニケ人への手紙第一3章1~13節

説教:神の御前に出るとき

はじめに

パウロが第二回目の伝道旅行の途中、いまのギリシャの国の中にある港町テサロニケで福音を語ったところ、多くの信仰者が起こされ、その町にも教会が立てられていきました。ところがこれを見ていたユダヤ人たちがねたんで激しく迫害してくる。それでとうとうパウロはテサロニケの中に留まることができなくなり、コリントと呼ばれる町にまで逃れることになりました。そのときパウロと一緒に働いていたのがシルワノとテモテだったので、この二人はテサロニケの近くに踏みとどまり、パウロと連絡を取りながら教会を助けます。なにしろ、生まれたばかりの教会です。周りにはお手本となる教会もなければ、経験豊かなクリスチャンもいません。きちんとした指導者がいなければ、大変だろうといういことは誰もが予想します。パウロもそうだった。それでなんでもテサロニケの戻らなければと願った。でも、事情が許さなくて戻れない。そこでテモテを代わりに遣わしたのだと、3章1節に書かれています。そのテモテが戻って来たとき、テサロニケ教会には深刻な問題が起きていると知らされて、パウロはこの手紙を書き送ることにします。それはどんな問題であったのか。そのことは今の私たちにどのように関わるのか。一緒に考えてまいります。

1 苦難にあう

パウロがテサロニケ教会の事をこれほどまで心配するのには、生まれたばかりの教会だったからということもありますが、もう一つ深刻な事情がありました。パウロはテサロニケの町の人々から迫害されて町から追い出されたばかりではなかった。パウロが逃れた町にまで追いかけてきて騒ぎを起し、やっぱりそこでもパウロはいられなくなってしまう。そういうことを執拗にやる人たちですから、当然パウロだけではない。町にいるほかのクリスチャンも迫害するわけです。それは思いもしなかったことではなく、実は最初から予想されていたことでした。4節。「あなたがたのところに行ったとき、私たちは前もって、苦難にあうようになると言っておいたのですが、あなたがたが知っているとおりに、それは事実となりました。」

日本に住んでいる限り、クリスチャンであることのゆえにいのちの危険を感じるような迫害にあ

うことはまずありません。でも、自分はクリスチャンなのに、仏式の葬儀に親族の一人として出席しなければならないときがあります。結婚した相手の実家に行ったら、あなたはこの家にお嫁に来たのだから、まず先祖を祭っている仏壇を拝みなさいと姑に言われた、そんな話を聞いたことがあります。これらは迫害ということではないかもしれませんが、いろいろなところで信仰を守っていく大変さを味わっているのではないのでしょうか。ですから私たちもある意味でテサロニケ教会の人たちと同じように、信仰をもっているがゆえの苦しみを味わっていると言えるでしょう。

2 テサロニケの信仰

1) 「良い知らせ」

さて、テサロニケから戻って来たテモテはどんな報告をしたかが6節にあります。「ところが今、テモテがあなたがたのところから私たちのもとに帰って来て、あなたがたの信仰と愛について良い知らせを伝えてくれました。また、あなたがたが私たちのことを、いつも好意をもって思い起こし、私たちがあなたがたに会いたいと思っているように、あなたがたも私たちに会いたがっていることを知らせてくれました。」

これを読むと、パウロはテサロニケ教会の信仰について手放しで喜んでいるかのように聞こえます。というのは、テモテは、「良い知らせを伝えてくれた」とありますし、7節には、「あなたがたことで慰めを受けました。あなたがたの信仰による慰めです」とあるからです。

2) 不足しているものがある

ところがよく読むとどうもそんな単純な話ではない。というのは、8節にこう書いてあるからです。「あなたがたが主にあって堅く立っているなら、今、私たちの心は生き返るからです。」

これはちょっとひねった言い方になっている。「(もしも)あなたがたが主にあって堅く立っているなら。」今、必ずしもそうではない、と言っているかのように聞こえる。それだけではない。10節にもこうある。「私たちは、あなたがたの顔を見て、あなたがたの信仰で不足しているものを補うことができるようにと、夜昼、熱心に祈っています。」

もしもテサロニケ教会の信仰がいまのままで十分であるなら、こんなことは書かないでしょう。パウロは「あなたがたの信仰で不足しているものがある」と言っているのです。

では何が問題であったのか、その具体的な話は4章以降に出て来ます。詳しくは次回以降に触れることとなりますが、わかりやすくすると、ある人たちがこんなことを言い出したということです。

「私はイエス・キリストを主と告白しているのだから、必ず救われて天国に迎えられ、永遠のいのちをもつことができる。」そこまではよい。問題はその後です。「こんなに自分たちが苦しんでいるのだから、主が再臨されて救ってくださる日はずっと先のことではなく、もう間近に迫っているはずだ。だったら今日明日、どう生きるのかとかどう歩めば良いのかとか、そんな細かな事を気にしなくても良い。」そんな考え方を言い広める人たちが現れてきた。

3) 主の再臨の日と今のとき

最初にも述べたように、テサロニケ教会は迫害にさらされています。苦しみあっていました。目の前の現実が苦しければ苦しいほど、主の再臨を待ち望む気持ちが強くなるのはごく自然なことです。マタイの福音書24章30節にこうあります。「そのとき、人の子のしるしが天に現れます。そのとき、地のすべての部族は胸をたたいて悲しみ、人の子が天の雲のうちに、偉大な力と栄光とともに来るのを見るのです。」44節。「ですから、あなたがたも用心していなさい。人の子は思いがけない時に来るのです。」

主ご自身も、主の再臨を待ち望みなさいと教えてくださいました。

ですから私たちも、それがいつであるのかは誰にもわからないけれど、主の再臨は必ずあるのだと信じ、その日を待ち望んでいます。でも、だからと言ってテサロニケ教会の人たちのように、主の再臨だけが大切であって、今日明日どのように生きるのか、そういうことは関係ない、ということではない。主の再臨を待ち望むということと、今日どう歩いていくのかということとは、別々の話ではない。いや、この二つはまるでコインの表と裏のように切り離すことができないものである。テサロニケの人たちは、これを別のこととして切り離してしまったところに大きな問題が生じた。そういうことです。

3 主の再臨の日

1) 父なる神の御前に立つ

なぜ別々の話ではないのか。主の再臨を待ち望むことと、今日私たちがどのように歩むのかということとがどこでつながるのか。最後にそのことを整理します。

そのヒントは13節に書かれています。「あなたがたの心を強めて、私たちの主イエスがご自分のすべての聖徒たちとともに来られるときに、私たちの父である神の御前で、聖であり、責められるところのない者としてくださいますように。アーメン。」

ポイントが三つあります。一つは、主の再臨の日、私たちは父である神の御前に立つことになる。いいでしょうか。私たちはなんとなく、主が来られる日、すぐに天国に迎えられていく、天国直行便を想像していたかも知れません。直行便ではない。まず父なる神の御前に立たされる。それが一つ目。

2) さばき

二つ目は、神の御前に立たされたとき、私たちは聖であって、責められるところのない者でなければならない。もしそうでなければ、天国には入れない。これを最後の審判とか、さばきとも言います。だれでも天国に入りたいと思います。でもそのためには聖であり、責められるところのない者にならなければならない。さあ、どうします。きょうからがんばりますか。でも、やめた方がよい。聖書はだれひとり努力によって天国に入ることができないと書いています。ではいったいどうしたらよいのでしょうか。

3) とりなす方がおられる

安心していただきたい。私たちはひとりぼっちで父なる神の御前に立つのではない。それがポイントの三つ目になります。こう書いてある。「私の父である神の御前で、聖であり、責められるところのない者としてくださいますように。」「してくださいますように。」だれがするのか。主です。主がしてください。それはどんなふうにおこなわれるのでしょうか。主ご自身が、十字架の苦しみを耐え忍んでくださって、からだに裂かれ、血を流し、ご自分のいのちを捨ててくださったから。この方は、信じる者のかたわらに立ってください、弁護してください。とりなしてください。

主の苦しみを知れば知るほど、そして自分の罪の汚さを知れば知るほど私たちはどうなるでしょう。主が救ってくださった恵みに感謝したくな

る。応えたくなる。それが日々の歩みにつながって行くのではないですか。信仰者としてどのように歩むのかを考え始めます。主が歩まれた道をたどろうとします。もちろんそこには苦しみがあります。迷うこともあります。主を裏切ったという思いで悲しむかも知れない。

でも、それでいいのだと思います。誠実に歩みたいと願うからこそ悲しみがあります。主は私たちの心のうちをよく知ってください、必ずあなたは聖であるにとりなしてください。そのようにして導いてくださる主の御名をあがめます。